



今日は野外調査の日だ。噂によれば、  
こうして無防備な状態で寝ていると  
その生物は姿を現すらしい。



音もなく忍び寄ってきたのは寄生バエだった。



この種の一番の特徴は、乳管内に卵を産み付けるところだ。

寄生バエの産卵管が乳管に挿入される。



産卵は間もなく始まるだろう。

数十個もの卵が乳管内になだれ込む。



痛みはなく、鋭い快感が  
乳頭から脳髄へ伝わってきた。

寄生バエの卵は数分も経たないうちに孵化する。

ズン  
ズン



んっ

その後、刺激を受けた乳腺から溢れ出る母乳をすすり成長する。

孵化した幼虫は急成長し、乳首から直接母乳を吸い出し始めた。

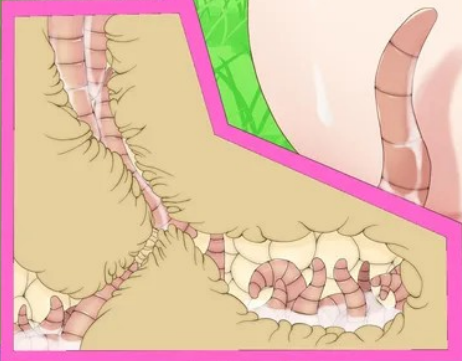
ちゅぽ  
ちゅぽ

はあ♡

はあ♡

るる

この状態になってしまうと、たとえ目を覚ましていたとしても抵抗するのは難しい。



乳管内の寄生虫を取り除かなければ。

岩陰に潜んでいたヒモムシに  
胸を近づけると、母乳の匂いに  
誘われてヒモムシが飛び出してきた。



ヒモムシはすぐに乳首に吸い付いた。

このまま母乳を吸わせてやれば、  
寄生虫を除去できるだろう。






母乳と寄生虫で膨れ上がっていた胸は  
勢いよく甘美の液体を吐き出した。

はぁ♡

はぁ♡

だが寄生虫はまだ乳管内に  
残っている。





こちらの意図を汲み取ったのか、  
再びヒモムシたちが乳首に吸い付いた。

ちゅぽ♡

ぐっ♡

ちゅぽ♡

感度の上がった乳首から伝わる  
強い快感に思考を奪われる。





寄生虫の除去には  
成功した。


じゅるる♡

はぁ♡

はぁ♡


ちゅぷ♡  
ちゅぷ♡

だがこのヒモムシたちを  
満足させるまではしばらく  
動けないだろう。



洞窟内で道に迷ってしまった。ふらふらと出口を探していると、すねの辺りに鋭い痛みが走った。

その直後、下半身の感覚を失い、その場に倒れてしまった  
これは神経毒だ。足元にはイツギンチャクに似た生物がいた。




長く伸びた触手が外陰部を押し広げ、人間の体の最も脆弱で最も敏感な部分を露わにする。

ぐにゅ♡

初めて目にする生物だったが、本能的にわかった。この生物はこれから私を凌辱するのだ。

先端部分に開口部のある細長い触手が  
陰核を強く吸い上げる。





今度は、おそらくは生殖器である部位を  
露わにし、こちらに見せつけてきた。

300000 ♡

これから私を弄び、凌辱するという  
意思表示だろう。



太く弾力のある生殖器が膣内の奥深くに挿入される。

んぐっ

ずいっ

リング状の“ひだ”が何度も膣壁に引っかかり、その度に感じられる強烈な快感に私は身をよじらせた。

生殖器のピストン運動はどんどん激しくなった。



ん♡

んあ♡

ちゅ♡

ちゅ♡

ちゅ♡


ちゅ♡



その生物が白濁液を吐き出すとともに、私も絶頂を迎えた。

下半身はまだ動かない。私がこの状況から脱出できるようになるまでこの凌辱行為は続くだろう。

トロネ



獲物を待ち伏せする  
生物は擬態を好む。

しかし、沼地一帯が吸液ヒルの群れ  
である例は極めて珍しいと言えるだろう。




2匹のヒルが乳首の位置まで  
這い上がってきた。

ぐにゅ♡

ぐにゅ♡

どうやらこのヒルたちの  
好物は母乳のようだ。



乳管に何か細長い  
器官が挿入される。

その直後、ヒルの体液の一部が  
乳首の先から注ぎ込まれるのを感じた。

乳首がじんと熱くなり、  
母乳が溢れだす。

はあ♡

はあ♡

とろ♡

とろ♡




下準備を終えたヒルたちは  
大きく口を開いた。






乳首に吸い付いたヒルたちが同時に母乳を飲み始める。

乳首の感度は極限まで高まっていた。ヒルたちが母乳を吸い出す度に私は大きく身をよじらせた。



私の抵抗の意志に反して、  
どくと母乳が溢れ出る。

しかし、ヒルたちはそれでも足りないと言わんばかりにさらに強く2つの乳首をしゃぶり始めた。



腹を空かせた他のヒルたちも  
集まってきた。

はめ♡

はあ♡

ごく♡

ごく♡

ごく♡

ごく♡

私にはもう抵抗する気力は残っていない。ヒルたちの  
思うままに乳首を凌辱され、最後の一滴まで母乳が  
搾り出されるのをただ待つだけだ。



ヒルの群れから私を  
助け出してくれたのは  
サキュバスたちだった。

私が無事に帰還するのを  
手伝ってくれるそうさ。

だがどうやら、私はその対価を  
支払わなくてはならないらしい。



彼女らにとある液体を飲むよう促された。

体の変化を見て、その液体が何だったのかすぐにわかった。

むくっ  
むくっ  
♡

これはふたなり化の秘薬だ。



彼女らが最初に取り出したのは  
数匹の小さなミミズだった。

ミミズは陰茎の上を這いまわり、  
敏感な部分を愛撫してきた。



1匹のミミズが尿管に侵入してきた。

不思議と痛みはなく、ミミズが尿管内で体をくねらせるたびに強い快感が私を襲った。




遅れて姿を現したのは  
彼女らのペットだった。

このペットの給餌を終えることが私を  
解放する条件だと彼女らに伝えられた。



ペットの大きな舌が陰茎を  
べろりと舐め上げる。

えろぢ  
♡



そいつは私の陰茎を  
しばらく舐めまわした後、  
今度はそれを啜え込んだ。

龟头を強く吸引される快感で  
私の体は大きく跳ねた。



ペットが陰茎を咥え込んだまま  
激しい往復運動をし始める。

唾液に覆われた舌と内部を動き回るミミズは複雑なリズムで  
私の陰茎を刺激し、かつてないほどの快楽を生み出した。



んん♡

んん♡  
んん♡  
んん♡



そうして私は絶頂を迎えた。

はあ♡

はあ♡

だがペットが満足している  
ようには見えない。

えろ♡

解放の条件を満たすまで  
私の体は耐えられるのだろうか。